

花粉発生源対策の最前線

花粉の少ない森林づくりに向けた各地の取組

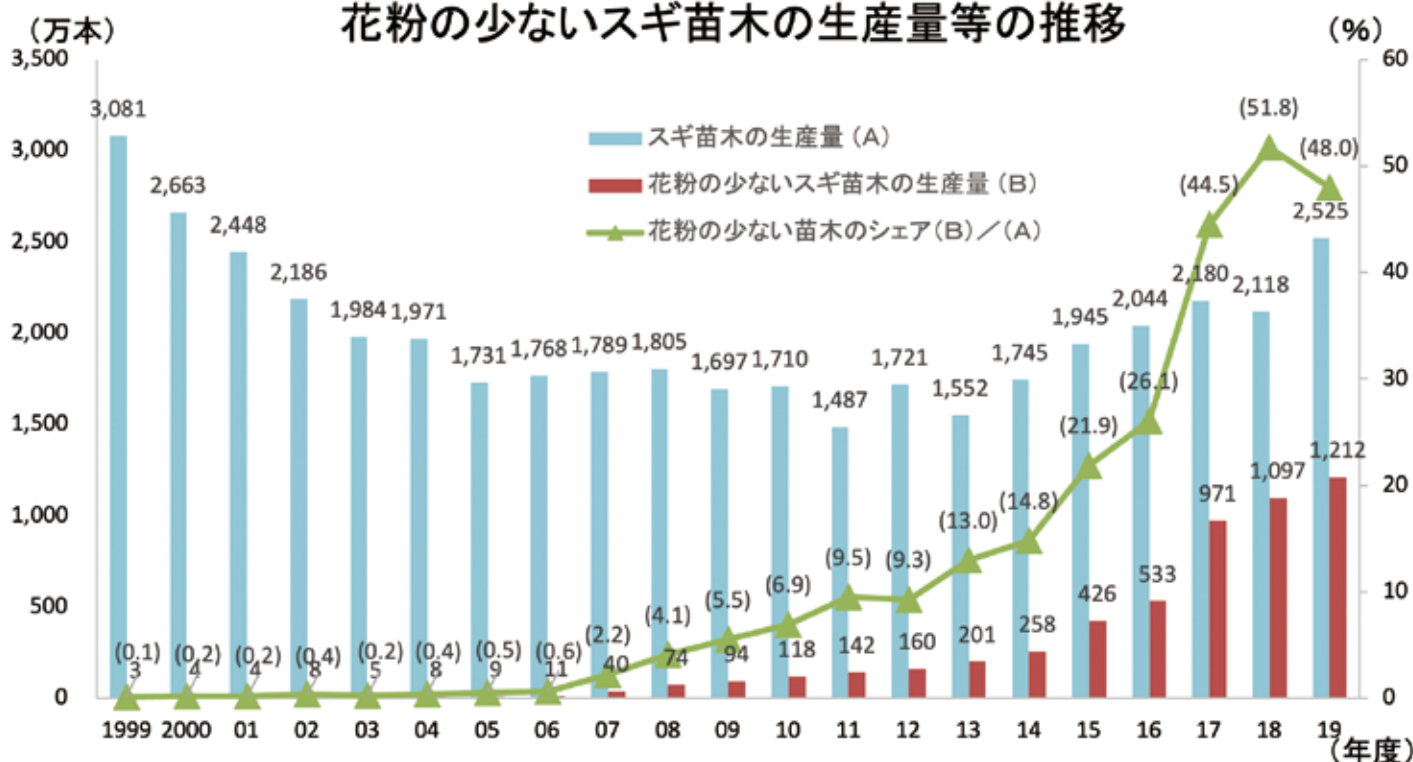
スギやヒノキは、成長が早く、通直に育つため、古くから各地で植えられ、建築や家具などの材料として私たちの生活に幅広く利用されてきました。特に、戦中や戦後の復興期に旺盛な木材需要に応えるために森林資源が過剰利用されましたが、その跡地には着実に植林が進められ、約1千万haある我が国の人工林のおよそ7割をスギ・ヒノキ林が占めています。現在ではその半数以上が持続可能な資源として利用期を迎えています。

その一方で、春を迎えるこの時期からはスギ・ヒノキ林から花粉が飛散し始め、このことが国民の約4割が罹患しているとも言われる花粉症の原因の一つとなっているために、その対策が求められています。

林野庁では、花粉発生源対策として、花粉を発生させるスギ・ヒノキ林の伐採・利用を進めるとともに、花粉の少ないスギやヒノキの苗木による植替えや広葉樹の導入などによる花粉の少ない森林への転換、スギ花粉の飛散を防止する薬剤の実用化に向けた取組などを支援しています。花粉の少ないスギの苗木の生産量は、平成30年には1千万本を越え、10年前の10倍以上となっています。

本号では、各地域で進んでいる花粉の少ない苗木を生産する先進的な取組や、花粉の少ない森づくりの事例をお伝えします。

花粉の少ないスギ苗木の生産量等の推移



資料：林野庁業務資料

注：2017年度までは花粉症対策苗木、2018年度からは花粉症対策に資する苗木を集計

静岡県での苗木生産の取組

静岡県は、花粉症対策として、優れた特性をもつ特定母樹など県独自の花粉の少ないスギの選抜に先進的に取り組む、今後の本格的な伐採・植替えに向けて、特定苗木への切り替えを進めています。従来の苗木に必要な種を取る採種園は屋外に造成されませんが、静岡県では、ビニールハウスを用いた閉鎖型採種園を造成しています。この閉鎖型採種園は、野外からのスギ花粉の混入を防ぎ、特定母樹同士の確実な交配を可能にするとともに、種子に被害を与えるカメムシの侵入を防ぐ等、管理を容易にし、質量ともに優れた種子生産に重要な役割を果たしています。現在、静岡県で生産されるスギは全て花粉の少ない苗木となっています。



果樹栽培の技術を応用し、親木をケースに植栽（写真提供：全国林業改良普及協会）

和歌山県での広葉樹林化の取組

和歌山県森林組合連合会では、スギ人工林の伐採後に、広葉樹のウバメガシへ植え替える取り組みを進めています。ウバメガシは、和歌山県の名産である紀州備長炭の原料になり、県の木にも指定されています。郷土樹種でシンボルとなるような広葉樹を導入し、天然力も活用して花粉の少ない森へ誘導していくことが期待されています。



紀州備長炭とウバメガシの苗木
(写真提供：和歌山県森林組合連合会)

スギ・ヒノキ花粉削減対策 シンポジウム2021

林野庁では、毎年、最新の花粉発生源対策の取組や花粉予測などを紹介するシンポジウムを開催しています。

昨年12月18日に岡山市において、岡山県と共催で開催し、新型コロナウイルス感染症対策を図った上で約100名の方にご来場いただきました。

シンポジウムでは、林野庁の花粉発生源対策や岡山県の花粉の少ないスギやヒノキの苗木の開発等の取組、花粉症対策品種やスギ花粉飛散防止剤の紹介、花粉と気候の関係、花粉症の治療法などについて講演を行い、花粉症対策の最新の情報について幅広く紹介しました。

